



フォーマルなウェスタンで約束の時間に登場した林さんは、ソファに座っても、たたずんでいるだけでも、どう見ても「カッコいい」人だった。2階は靴を履いたまま過ごせる住居で、完全にウェスタンをライフスタイルにする。



ギブソンが100周年記念にハーレーとコラボしたギター。ヘッドとピックガードにロゴ。ポジションマークもハーランドシールドに。



ウェスタンなんていう言葉が理解されない時代に生まれた。何しろ小学校に上がる直前に終戦を迎えているのである。しかも実家は呉服屋。アメリカ文化に触れる時代でもなければ、環境でもない。それが逆にアメリカとの出会いを早くしたのかもしれない。日本を占領した進駐軍がアメリカの土産物にしたことと実家の呉服屋に押し寄せたのである。未知の異国人を目の前にした時に、林さんの中に芽生えた感情は恐怖ではなくカッコ良さでそれが「憧れ」に変わった。

憧れ続けても現代のよきなメディアがあるはずもなく、情報なんてどこにもなかった。父親は好奇心をくすぐるような、オモチャや楽器は与えてくれたが、蓄音機（レコードプレーヤー）や当時出始めたテレビを買ったのは最後まで許してくれず、ラジオだけが音を出す機械だった。その中からある日、英語が飛び出し、聞いたことのないような音楽が鳴り出した。FENの出現だった。

そこから流れるカントリーミュージックに夢中になった。プレスリーの出現は衣裳の派手さはかりが目についてしまった。ビートルズの音は自分の求めるものからかけ離れすぎていた。世界的な大スターの出現は自分がいかにカントリーが好きかを再確認させてくれた。音楽から始まればファッションに向かう。ウェスタンとの出会いはそんな経緯だった。音楽からファッションという流れは今も昔も何も変わらない。違っただけは、やはり今のようにシャツ一枚でも簡単に手に入れられる時代ではないということだ。どこを探してもウエスタンシャツ一枚見つからない。手に入るのはジーンズがいいところだった。

時代はBANを先駆けにトニッシュショナルがお洒落とされた時代だ。やっと見つけたウエスタンシャツは3万円を超えるような超高価な代物で手が届くものではなかった。ハットやブーツ、どれもが手に入るものではなかった。時代の背景は何に対してもあった。



ハットもブーツもウェスタンには欠かせないアイテムだ。自然とそれらを身につける。どこから「粋」という言葉が思い浮かぶ。



「進駐軍」という過去を見て、 「舶来」に憧れ—今—を見る。



林 裕

(はやしゆたか) 69歳。武蔵屋通館代表。埼玉県上尾市出身。同在住。どんな状況にも対応できるだけのハーレーを所有。カントリーミュージック、バイク、犬、アルコールを愛しライフスタイルにしている。そして何より愛妻家である。

文：大森茂幸
写真：金沢文春